

果実品質や収量性が優れるイチゴ新品種 「佐賀i5号」と「佐賀i9号」を育成！

【 野菜育種研究担当：45-2143 】

農業試験研究センターでは、関係機関・団体や生産農家と連携を図り、平成22年から「いちご次世代品種緊急開発プロジェクト」を開始し、①食味が良好で、②果皮の色が濃く、③年内収量が多いことを育種目標に新品種の開発に取り組み、「佐賀i5号」と「佐賀i9号」を育成しました。

両品種ともに品種登録の申請を行い、出願が公表されています（平成28年5月）。現在、普及性に向けた最終的な判断を行うため、現地試験を行っています。

佐賀i5号の特徴



あまおとめ♀
×
紅ほっぺ♂

大玉でツヤ
贈答用にも向く

果実が硬い
輸出用に向く

「さがほのか」と比較して…

- ・草姿は立性で、草高は高い
- ・花芽分化はやや遅く、収穫開始は12月上旬
- ・連続出蕾性は劣る
- ・頂花房の花数は20花前後が多い
- ・果皮は光沢のある鮮赤色で濃く、果肉は淡赤色
- ・糖度は9%を超え、適度な酸度があり、食味が優れる
- ・果実は硬い
- ・早期収量、総収量はやや多い

佐賀i9号の特徴



佐系14号♀
×
やよいひめ♂

超多収
生果用全般に向く

「さがほのか」と比較して…

- ・草姿は立性で草高は高い
- ・花芽分化はやや遅く、収穫開始は12月上中旬
- ・連続出蕾性は劣る
- ・頂花房の花数は20花前後が多い
- ・果皮は濃赤色でかなり濃く、果肉は赤色
- ・糖度は同等で、適度な酸度と爽やかな香りがあり、食味が優れる
- ・果実はやや硬い
- ・早期収量、総収量は多い

表1 「佐賀i5号」「佐賀i9号」の収量および果実特性^z

品種名	総収量 (g/株)	商品果収量(g/株) ^y		平均 1果重 (g)	収穫 開始日 (月/日)	糖度 (Brix%)	果皮色 ^x L*b*/a*	果実硬度 (g/3mmφ)	
		早期 11~1月	全期 11~4月					果皮	果肉
		佐賀i5号	756						
佐賀i9号	862	310 (123)	810 (120)	17.0	12/8	8.5	20.2	87	41
さがほのか	707	253 (100)	674 (100)	15.5	11/29	8.6	27.7	78	34

^z 2014~2015年の2か年の平均値

^y 7g以上の可販果

^x 数値の小さい方が濃赤

ごあいさつ

平成29年度を迎え、当センターも新たな体制で、研究開発等に取り組んでいるところです。

去年は、本県主力品目のタマネギが、べと病の被害を受け、農家経営に深刻な影響をもたらしました。また、天候不順の中で、麦・大豆の反収が、伸び悩んでいることなど、早急に対応が必要となる課題を抱えております。

一方で、イチゴ、花きの新品種の育成・開発やコメの「さがびより」の7年連続の特A受賞などの嬉しい話題もありました。

さらに、施設野菜の統合環境制御技術や水田農業における低コスト化・省力化など、ICT農業を進めるために取り組んでいる研究課題が平成28年度補正予算の地方創生交付金の対象に採択され、本年度から、一歩進んだ取り組みが出来ることとなりました。

このように、当センターでは、緊急に解決すべき課題や将来を見据えた課題の両面から、鋭意、研究に取り組んでいるところであり、農業がやりがいと魅力のある産業となるよう、これからも、スピード感を持って、課題解決に努めていくこととしております。

今後とも、高い研究レベルを維持しながら、関係機関・団体等との連携強化によりまして、一層の試験研究の効率化と加速化に全力で取り組んでまいりますので、引き続き、皆様のご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。



所長
田崎 博文

平成28年度の試験研究成果をとりまとめました

	試験研究成果情報	対象	研究担当
1	中山間地に適する飼料用米品種として中生の「みなちから」を選定	水稻	山間稲作
2	果実品質に優れ、果実が大きいイチゴ新品種「佐賀i5号」	イチゴ	野菜育種
3	色が濃く、収量が多いイチゴ新品種「佐賀i9号」	イチゴ	野菜育種
4	アスパラガス半促成長期どり栽培における茎葉繁茂度の測定法と適正値	アスパラガス	野菜栽培
5	午後高温・夕方急速降温管理による促成栽培キュウリの果実肥大促進技術	キュウリ	野菜栽培
6	佐賀県のイチゴほ場で採集したナミハダニの各種殺ダニ剤に対する感受性	イチゴ	病害虫
7	佐賀県におけるタマネギべと病菌のメタラキシル剤に対する感受性低下	タマネギ	病害虫
8	半促成長期どり栽培アスパラガスにおけるカンザワハダニの発生消長と薬剤に対する感受性	アスパラガス	病害虫
9	中山間地での子球(セット球)利用の冬どりタマネギ栽培における適品種、定植時期	タマネギ	山間畑作
10	ホオズキ品種「佐賀H5号」の切り枝栽培に適した栽植密度	ホオズキ	花き
11	ホオズキ品種「佐賀H5号」の切り枝栽培における収穫2週間摘芯による上位節の充実	ホオズキ	花き

※成果情報は、当センターのホームページに掲載しています。検索方法は、4頁目を参照してください。

研究成果の紹介

タマネギベと病菌のメタラキシル剤に対する感受性低下とその代替防除技術

【病害虫・有機農業研究担当:45-8808】

1. メタラキシル剤に対する感受性低下

タマネギベと病に対して、リドミルMZやフォリオゴールド等のメタラキシル剤（メタラキシルあるいはメタラキシルMを含む剤）が、基幹防除剤として長年使用されてきました。このメタラキシル剤について、圃場での防除試験および室内検定（図1）を行ったところ、メタラキシル剤の防除効果の低下が認められるとともに、県内各地において本剤の低感受性菌（薬剤が効きにくい菌）が発生していることが明らかになりました。

2. 代替防除技術

べと病は、3~5月に孢子がタマネギに感染し、その後、約2週間の潜伏期間を経て、発病します（図2）。感染時や潜伏期間中は、タマネギの異変を肉眼で確認することはできません。発病して、初めてべと病の症状を肉眼で確認することができます。このような中、各薬剤の防除適期は、「発病時」や「発病直前」ではなく「発病の約2週間前の感染前」であることを明らかにしました（図2）。また、各薬剤の防除効果を検討したところ、マンゼブ剤（ジマンダイセン水和剤）の予防散布の防除効果が高いことがわかりました。

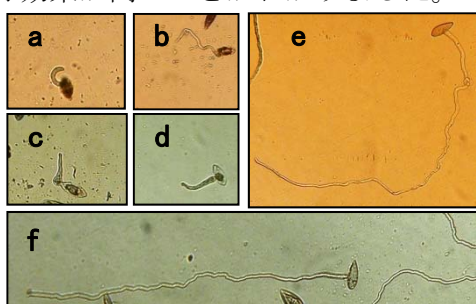


図1 メタラキシルに対する感受性菌（a~d:発芽管の伸長が阻害されている）と低感受性菌（e, f:発芽管が伸長している）

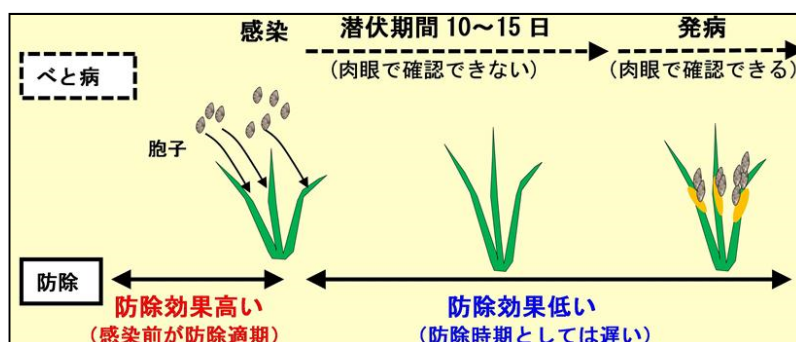


図2 タマネギべと病の生態と防除適期

中山間地に適する飼料用米品種「みなみちから」を選定

中山間地における飼料用米品種としては、いもち病と倒伏に強く、極多収である中生品種「みなちから」（旧系統名「中国217号」）を選定しました。「みなちから」は、「さとじまん」と比較して次のような特性を持っています。

- (1) 出穂期は3日早く、成熟期は7日遅い中生である(表1)。
- (2) 稈長は4cm短く、倒伏に強い(表1)。
- (3) 千粒重は約1g重く、粗玄米重は12%多い(表1)。
- (4) いもち病に強い。真性抵抗性遺伝子 *Pib* を持ち、現在のところ佐賀県内では発病が認められない(表1)。
- (5) 玄米はやや大粒で一般食用品種との識別性がある(図2)。

以上の事から、山間部で取り組みやすい生産調整作物として期待されています。

【山間稲作研究担当:0952-56-2040】



図1 「みなちから」の草姿(登熟後期)

表1 「みなちから」の生育・収量特性（三瀬分場、2014-2015年）

品種名	出穂期 (月・日)	成熟期 (月・日)	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/m ²)	粗玄米重		倒伏 程度 (0-5)	脱粒性 の 程度	穂いも ち発生 程度 (0-5)		
						標肥 (kg/10a)	多肥 (kg/10a)					
みなちから	8.06	10.11	70	20.9	288	745	781	26.1	0.0	6.4	難	0.0
夢あおば	7.26	9.02	71	19.6	291	614	690	26.6	0.0	6.6	難	0.0
モミロマン	8.16	未達	86	22.0	305	678	771	24.8	2.5	6.0	難	0.0
タカナリ	8.11	10.13	71	23.7	276	661	782	22.6	2.0	7.3	や易	0.0
ホシアオバ	8.08	10.01	89	19.8	275	690	746	31.0	1.5	6.3	や難	0.0
べこあおば	7.31	9.22	65	19.2	316	675	745	33.5	0.0	6.6	難	0.0
(対)さとじまん	8.09	10.04	74	19.6	361	634	707	25.1	0.0	6.2	難	0.5
(比)さがうらら	8.11	10.05	77	19.2	420	611	661	22.0	0.0	6.2	難	1.5

注 1) 標肥T-N9.6kg/10a、多肥T-N12.8kg/10a
2) 移植期は5月18日



図2 玄米と籾の形状(上段:籾、下段:玄米)
左:「みなちから」 右:「さとじまん」

平成29年度から新たに取り組む 試験研究課題

	課 題 名	研究 担当	期間
1	農業に関する画期的新技術の 開発のためのプラットフォーム	企画 調整	H29 ～33
2	大幅な労力軽減が可能な種子 繁殖型イチゴ・単為結果性ナス 新品種の開発	野菜 育種	H29 ～35
3	国内外で支持される競争力あ る高品質イチゴ新品種の育成	野菜 育種	H29 ～38
4	‘さがほのか’の収量増加、果 実糖度の向上を実現する環境 制御技術の確立	野菜 栽培	H29 ～
5	いちご新品種栽培技術の開発	野菜 栽培	H29 ～31

作物栽培研究担当の紹介

私たちの業務は、水稻、麦類、大豆の省力栽培法や多収技術の開発、収穫物の品質向上対策、各作物における雑草防除技術（除草剤、耕種的防除法）の開発などを行っています。

また、将来の導入が期待される有望な新品種や新系統については、現場への普及に先駆けて、その栽培方法の検討を行っています。

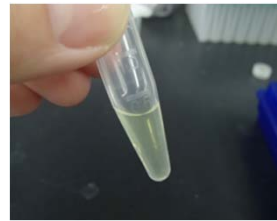
さらに、研究開発の他に定型的な業務として、水稻、麦類、大豆の作況試験を実施しています。これは、毎年、同じ耕種条件で栽培することによって、その年々の作柄を評価するものです。この調査で得られたデータを基に、「米づくり情報」「麦づくり情報」などを作成し、県のホームページなどで広く一般に公開することで、生産者の方々に、日々の農作物管理に役立てていただいています。



遺伝子マーカーの研修を受講しました

作物育種 池上 紀子

茨城県つくば市にある次世代作物開発研究センターにて、水稻の病害虫抵抗性を判別する遺伝子マーカーの研修を受講しました。この研修で、佐賀県が育成している系統の中から、病害虫抵抗性をもつ158系統を選抜しました。さらに、他の農業形質の評価も選抜項目に加え、葉いもち抵抗性とトビイロウンカ抵抗性をあわせもつ佐賀65号を育成することができました。



新職員紹介

平成29年度に、新規採用されました。早く一人前になるよう頑張ります！



- 土壤肥料研
牧野技師
- 野菜栽培研
伊藤技師
- 総務担当
田中主事
- 作物栽培研
山口技師
- 花き研
松本技師

発行所

佐賀県農業試験研究センター

(企画調整部 企画調整研究担当)

〒840-2205 佐賀県佐賀市川副町南里1088

TEL 0952-45-2142

FAX 0952-45-8801

E-mail nougyoushikensenta@pref.saga.lg.jp

佐賀県農業試験研究センター

検索

当ニュース記事を利用される場合は、御一報ください。